

氏名（本籍）	マツモト チサト 松本 千里（広島県）
学位の種類	博士（芸術）
学位記番号	甲第 152 号
学位授与年月日	2023 年 3 月 23 日
学位授与の要件	広島市立大学大学院学則第 36 条第 2 項及び広島市立大学学位規程第 3 条第 2 項の規定による
学位論文題目	現代美術との共通点を介した伝統工芸の潜在力による可能性の拡張 —絞り染め技法を基軸にした技法の分解・素材の再構成・展示方法の 一体化—
論文審査委員	主 査 准教授 野田 睦美 委 員 教 授 伊東 敏光 委 員 准教授 石松 紀子

論文内容の要旨

伝統工芸は技法と素材と機能性によって成り立っている。伝統工芸の機能性は日常生活を通して多くの人と繋がってきたが、人々の日常生活が変化した現代において伝統工芸の機能性だけでは多くの人と繋がれず、身近な存在から遠ざかっている現状がある。筆者は伝統工芸の技法と素材を用い、機能性ではなく、展示方法によって現代の人々と新しい関係を築けないかと考えた。本論で展開している技法の分解と素材の再構成と展示方法の一体感という筆者の研究構想は、工芸の相対化・複合的性質・生活感情という工芸評論が深めており、それを元に制作した作品と鑑賞者の反応によって伝統工芸が持つ潜在的な可能性を再考する。また、現代美術が日常生活を要素として表現に取り入れているところを伝統工芸の共通点と考えた。現代美術は日常生活を要素として既成の芸術を拡張しようとしたように、伝統工芸が日常生活と繋がっていた潜在力を用いて、伝統工芸でありながら伝統工芸だけでは評価できない新しい表現を創造することで、伝統工芸の可能性を拡張することができるのではないだろうか。現代美術との共通点を通して伝統工芸の潜在的な力による可能性を拡張させることで、伝統工芸を超えた新しい表現へ展開しようとするのが本論文の目的である。

第 1 章では、伝統的な染織技法である有松手蜘蛛絞り技法の工程を分解し、布を糸で括った立体的な形を観察して立体造形として手蜘蛛絞り技法が自立する方法を探究した。そのために、従来の絞り染め技法には必要ない絞り粒の収縮データを求め、工程もひとつの技法の特長であると主張し、絞り染め技法の模様による平面的な視覚表現ではなく、絞り粒という絞り染め技法の新しい概念による触覚表現の展開が可能であると論じる。絞り染め技法による立体化を受けて第 2 章では、絞り粒との新しい関係を築こうと固定概念に縛られない素材で再構成を行う。伸縮性に優れたポリエステル布を使って質感を追求した結果、絞り粒の触覚性が電動機器を用いた生動感ある表現へと展開する。このように、立体的な絞り粒に適応する新しい素材を開拓した結果、絞り粒の触覚性がより生かされ、技法と素材がお互いの特長を引き出す相乗効果をもたらすことで組み合わせの整合性と自由度の高さを主張する。第 3 章では、作品が人々と近い存在になるため、技法と素材を生かした展示方法によって親密性をたかめるような展示方法

を試みる。展示の環境に寄り添うような作品や支持体を作品のポイントとした展示方法などから、鑑賞者の身体を通して行われる体験によって作品を一体化することを目標に、様々な展示方法によって作品形態を変えながら鑑賞者との親密性を求めた。その展示方法のいずれもが技法と素材の性質なしにはできなかった表現であり、展示方法の多様なバリエーションは技法の触覚性と素材の性質で支えられていると論じる。

以上の創作活動により、日常のなかで作品と人々の接点を持つような展覧会をすることで伝統工芸と現代美術の両方の領域で作品を発表することができた。これは多様な領域に作品が存在していることを証明しており、伝統工芸の潜在力によって芸術から距離がある人を対象にした展覧会が可能であることの根拠である。以上のことから、伝統工芸的な技法でありながらも表現においては伝統工芸と現代美術にまたぐような見方がなされていると解釈できる。技法の分解、素材の再構成、展示方法の一体化を基軸としているところが他の作家とは異なる点であり、筆者は伝統工芸の潜在的な力において人々との親密性を高めることで、伝統工芸であって伝統工芸ではない表現が拡張していると結論づけている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、現代美術と伝統工芸の共通点は表現の要素として日常生活を取り入れていることであると考察し、その共通点と申請者の技法と現代の素材と鑑賞者が身近に体感できる展示方法によって、芸術と人々の新しい距離感を提案し、解決への過程が詳しく論じられたものである。第1章「技法の展開」では、伝統工芸の有松手蜘蛛絞り技法の工程を分解し、構造的な強度と手で絞る行為から、布を糸で括った形体を抽出して触覚を伴う連続した変化のある立体表現が可能であることを明らかにした。また、大量の布を締め括るという行為が内包するテーマについて述べている。第2章「素材の再構成」では、複合繊維の原料と構造による優れた伸縮性と耐久性を生かして電動機器を組み合わせることで生動感のある表現や、地域に密着した作業服を用いてメッセージ性の強い表現等について検証し、独自の造形を明らかにした。第3章「展示方法の一体化」では、第1、第2章で述べた技法及び素材と展示方法を一体化することで鑑賞者が作品に親しみを抱いて体験できる鑑賞方法を提案した。それは鑑賞者の家屋や家具を作品に取り組むことで、視覚と触覚とともに鑑賞者の記憶に直接訴え、遊びを誘発させるものであった。最後にまとめと今後の展望について述べている。

申請者はそれぞれ異なる表現方法によって制作された16点の実制作を通して伝統工芸の有松手蜘蛛絞り技法の分解、素材の再構成、展示方法の一体化について、成果を踏まえて分析し、自身の創作活動における理論を組み立てた。論文と作品に齟齬がなく、新しい表現の可能性を示唆する研究成果として見事に作品が充実している点に於いても高く評価し、博士学位審査を合格と決した。